生涯学習としての韓国語教育の方向性に関する一考察[1]
――PAC 分析による事例研究を通じて――

A Discussion on the Direction of Korean Language Education as Lifelong Learning: A Case Study Based on PAC Analysis

酒 勾　康 裕 (Yasuhiro Sakawa)*

ABSTRACT: In this paper, I used Personal Attitude Construct (PAC) analysis to examine adult students learning Korean and explore the meaning and purpose of continuous Korean language learning. The results revealed that these students had positive attitudes toward learning Korean and perceived it as an enjoyable part of their lives. As there are few studies on adult students in Korean language education, these findings could become a basic reference source for exploring the direction of Korean language education as lifelong learning.

KEYWORDS: 生涯学習/Lifelong learning, 成人韓国語学習/adult Korean language education, PAC分析/PAC analysis, 韓国語学習の意義/the meaning of continuous Korean language learning

1. はじめに

韓国の国内外において韓流や K-POP をはじめとした大衆文化の広がりや、韓国の国際的な認知度の高まりと共に韓国語学習者数が増加してきた。韓国内の韓国語学習者数増加の一例として、韓国の高等教育機関における外国人留学生数は 2006 年に 32, 557 名であったが、2015 年は 91, 332 名に増加したことが挙げられる[2]。また、学習者の背景も多様化が進んでいるが、この多様化の中には居住国や地域のほか、韓国語学習の動機、学習目的、レディネス等が挙げられ、日本国内においても日韓の相互

[1] 本稿は 2017 年 1 月 7 日にアジア韓国語文化教育研究会国際学術大会（於台湾 国立政治大学）にて口頭発表した内容を基に日本語に置き換え大幅に修正・加筆したものである。

[2] 교육통계서비스(KOREAN EDUCATIONAL STATISTICS SERVICE)の 2015 年度統計資料による。http://kess.kedi.re.kr/mobile/stats/school?menuCd=0102&cd=1857&survSeq=2015&itemCode=01&menuId=m_010205&uppCd1=010205&uppCd2=010205&flag=A（2017 年 8 月 23 日アクセス）

*Associate Professor of Korean Language Education at the Faculty of International Studies, Kindai University. E-mail: sakawa@intl.kindai.ac.jp

©2017 Yasuhiro Sakawa
Sakawa, Y. (2017). A Discussion on the Direction of Korean Language Education as Lifelong Learning: A Case Study Based on PAC Analysis. *Journal of International Studies, 2,* 31-39.

交流が増す中、幅広い年齢層が学び、多様な背景を持った韓国語学習者がいる。ハングル能力検定協会（2017：133）によると、2016年度秋季受験者のうち、年代別出願者数は、10代未満4名（0.0%）、10代2,644名（25.5%）、20代3,847名（37.1%）、30代1,074名（10.3%）、40代1,269名（12.2%）、50代951名（9.2%）、60代503名（4.8%）、70代以上88名（0.8%）であり、職業別出願者数は、高校生695名（6.7%）、大学生3,782名（36.4%）、その他学生964名（9.3%）、教職員123名（1.2%）、公務員319名（3.1%）、会社員2,518名（24.3%）、自営業176名（1.7%）、主婦1,138名（11.0%）、無職・他591名（5.7%）、未記入74名（0.7%）であるという。

このような多様な学習者がいる中、筆者が受け持つ韓国語クラスには上記のように多様な年代や職業を持った学習者がいるが、同レベルの授業を繰り返して複数年受講するケースも見受けられ、高校生や大学生の学習への取り組み姿勢とは異なる様子が窺える。これまで韓国語学習の動機やニーズに関する研究は林・姜（2006）や李（2007）等があるが、いずれも大学生を対象としており、様々な社会経験を有する成人を対象とした韓国語学習に対する調査・研究は見受けられない。

そこで、本稿では高等学校や大学を卒業した後、一定の社会経験や多様な背景を持った日本語を母語とする成人韓国語学習者へのインタビューを通じ、その分析結果をもとに生涯学習としての韓国語教育の持つ方向性について検討する。

成人を対象とした教育は、小学校や中学校、高等学校、大学とは異なり、学習構成員の社会的経験や背景等が多様である。成人教育をはじめ社会の課題に対する問題提起と解決の方向を多く示したLindeman（1926：31）は「伝統的な教育においては、生徒は権威あるカリキュラムに自分を適応させる必要があった。成人教育においては、カリキュラムは生徒のニーズと関心に応じて構築される」としているが、成人を対象とした韓国語教育においても学習者の関心や韓国語学習に対する意義を知ることにより教育の方向性が定まるものと思われる。すなわち、成人韓国語学習者が持つ韓国語学習の意義を把握することは、生涯学習としての韓国語教育の方向性を決定する上で一助になると考えられる。

2. 研究目的

本稿では筆者が担当している大学の韓国語課外講座（一コマ90分、年間合計20回開講、受講条件はなく希望者は受講可能）に通う受講生を対象に、インタビューを通じて韓国語学習者への関心や韓国語学習の持つ意義について探り、生涯学習としての韓国語教育を行う上での方向性を定める基礎的資料を提供することを目的とする。

3. 研究方法

3.1. 対象および時期

本稿における調査協力者（以下、協力者）は 2 名とし、調査時の学習背景等については次の通りである。

1)協力者 A（性別: 女性、年齢: 50 代、職業: 主婦、韓国語学習期間: 約 2 年、韓国語学習経歴: 韓国語課外講座を受講し 3 年目、これまで 1 年目に入門クラスを受講し 2 年目以降初級クラスを受講中、韓国語のレベル: 初級）

2)協力者 B（性別: 女性、年齢: 20 代、職業: 会社員、韓国語学習期間: 3 年以上、韓国語学習経歴: 大学在学時に第二外国語として 2 年間の学習歴あり、その後も独学を続ける、韓国語課外講座の受講は 1 年目で 20 回の授業のうち 15 回目を受講、韓国語のレベル：初級後半）

調査の時期は 2016 年 11 月であり、協力者 A と協力者 B は異なる日にインタビューを行い、調査時間は一人当たり約 90 分であった。

なお、協力者には調査概要や調査者（筆者）が個人情報の守秘義務を遵守すること、また調査内容は今回の研究のみに使用することを明らかにし、研究調査実施に同意を得て調査を行なった。

3.2. 分析方法

本調査では、個人別態度構造分析法（Analysis of Personal Attitude Construct: PAC 分析法）を用いる。PAC 分析は社会心理学と臨床心理学を研究する内藤（1997）により開発された研究手段である。この分析方法は、1)該当テーマ（刺激文を提示）に対する自由連想、2)連想項目間の類似度評定、3)類似度距離行列によるクラスター分析、4)協力者によるクラスター構造の解釈やイメージの報告、5)協力者による総合的解釈を通じて、個人の態度やイメージ構造を分析する方法である。この方法は教育分野や異文化との接触場面におけるイメージの変化に関する研究に多く使用されている。例えば、日本における留学生の文化受容度や適応態度とその変化の分析（井上: 1997）、留学を行う予定の日本人学生を対象に異文化や外国、外国人に対してどのようなイメージを持っているかの分析（池田: 2010）、留学生が持つ教師観や授業観等に対する分析（安他: 2013）、海外における日本語学習が学習者にどのような意味を持つかに対する分析（新井: 2015）、中学校技術分野を専攻する大学生が持つ授業観の分析（小泉他: 2016）等が行われてきた。

PAC 分析は、半構造化面接と比べ調査対象者の内面に深く触れられると同時に、

クラスター分析を用いることで、個人の体験の構造をより深く捉えることができるメリットがあり、一般的な実験や調査により平均値としての人間（行動）を解明することを目的としている法則定立的な研究法とは異なり、人間を「自身の行動を意味づける存在」と見なし、個人を全体的に捉えようとするホリスティック（holistic）な観点に立つ研究法である（中川 2013: 57）。

本稿においても個別インタビューを通じて協力者の内面に接近しながら協力者自身が意識をしていなかった考えや思いを連想させながら韓国語学習に対するイメージ抽出が可能であると判断し、PAC分析による調査を上述の1)から5)に沿って行う。

まず、本研究では、協力者にイメージ連想をさせるため次の刺激文を口頭および書面にて提示した。

> 【刺激文】「あなたは、今の生活の中で韓国語を学ぶことに対して、どのようなことを感じたり考えたりしていますか。そして、韓国語を学ぶことで、今の生活にどのように役立っていると感じていますか。思い浮かんだことば（単語や短文）や、イメージを順番にカードに記入してください。」

各協力者は連想したキーワードをカード（縦: 約 10cm、横: 約 3cm）に記入した後、このカードを協力者本人が判断して重要度順に並べた。続いて協力者が並べた各項目をそれぞれ比較しながら距離が近いと考えた場合は「1」を、距離が遠いと考えた場合は「7」として点数を類似度距離行列として定めた。記載された数字を調査者が統計ソフト HALBAU7（ver7.5.1）を用いて統計処理を行い、統計処理後に提示されたデンドログラムをクラスターに分離し、各クラスターについて協力者が名称をつけ、またそれぞれのイメージに対する解釈を行い、最後に総合的解釈を行った。

4. 分析結果

上述した分析方法に従って形成された協力者 A および協力者 B のクラスター分析の結果を示す。

4.1. 協力者 A の結果

協力者 A のクラスター分析の結果は図 1 の通りである[3]。

[3] 図内最左部の数字は重要度、(　)内は協力者本人による各イメージに対する肯定(+)否定(-)中間(0)の判定であるが、今回のインタビューでは(-)と回答した項目が現れなかった。

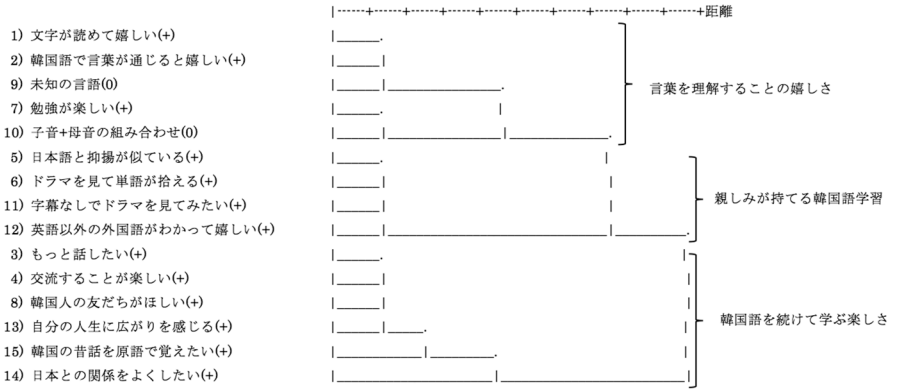

図 1　協力者 A のデンドログラム

クラスターは三つから成り立っており、クラスター1 には、『1)文字が読めて嬉しい、2)韓国語で言葉が通じると嬉しい、9)未知の言語、7) 勉強が楽しい、10)子音+母音の組み合わせ』があり、協力者 A はこれを「言葉を理解することの嬉しさ」と名をつけた。これについて協力者 A は「分からなかったことを理解することに喜んでいる」と解釈し、「さらに学習欲が増してきた」と回答した。

クラスター2 には、『5)日本語と抑揚が似ている、6)ドラマを見て単語が拾える、11)字幕なしでドラマを見てみたい、12)英語以外の外国語がわかって嬉しい』がある。これについて協力者 A は「親しみが持てる韓国語学習」と名付けた。さらに、これについて協力者 A は「韓国語が身近なところにある近い存在」と解釈し、「自身が韓国語の会話を捉えている」と回答した。

クラスター3 には『3)もっと話したい、4)交流することが楽しい、8)韓国人の友だちがほしい、13)自分の人生に広がりを感じる、15)韓国の昔話を原語で覚えたい、14)日本との関係をよくしたい』があり、協力者 A は「韓国語を続けて学ぶ楽しさ」と名付けた。これについて協力者 A は「継続学習の楽しみ」と解釈し、「可能性や広がりを感じる」と回答した。

各クラスター間の比較について協力者 A は次のように解釈をした。クラスター1 と 2 の比較は「勉強一般のイメージからはじまり、韓国語の勉強を通して会話やおしゃべりの楽しさを感じる」、クラスター1 と 3 の比較は「勉強を通じることで可能性や広がりがある」、クラスター2 と 3 の比較は「韓国語を手段として交流を行い、分かりあう」と解釈した。そして、全体のイメージについては、「クラスター1 からクラスター3 までが段階を追っていて、韓国語を学ぶことで日韓交流につながる」と解釈した。

4.2. 協力者 B の結果

協力者 B のクラスター分析の結果は図 2 の通りである。

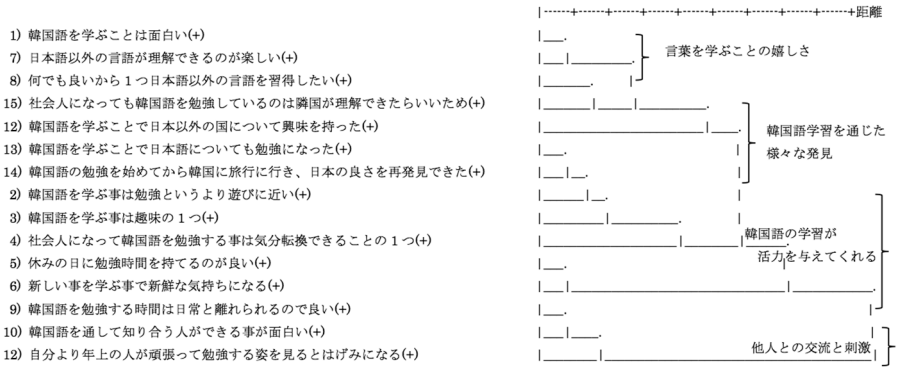

図 2　協力者 B のデンドログラム

協力者 B の場合、クラスターは四つから成り立っており、クラスター1 には、『1) 韓国語を学ぶことは面白い、7) 日本語以外の言語が理解できるのが楽しい、8) 何でも良いから 1 つ日本語以外の言語を習得したい』があり、協力者 A は「言葉を学ぶことの嬉しさ」と名をつけた。これについて協力者 B は「語学習得の楽しさ」と解釈し、韓国語を続けて学びたいと回答した。

クラスター2 には、『15)社会人になっても韓国語を勉強しているのは隣国が理解できたらいいため、12)韓国語を学ぶことで日本以外の国について興味を持った、13)韓国語を学ぶことで日本語についても勉強になった、14)韓国語の勉強を始めてから韓国に旅行に行き日本の良さを再発見できた』がある。これについて協力者 B は「韓国語学習を通じた様々な発見」と名付けた。さらに、これについて協力者 B は「韓国と日本を比較することで驚きがある」と解釈し、「外国への興味や憧れ」と回答した。

クラスター3 には『2)韓国語を学ぶ事は勉強というより遊びに近い、3)韓国語を学ぶ事は趣味の 1 つ、4)社会人になって韓国語を勉強する事は気分転換できることの 1 つ、5)休みの日に勉強時間を持てるのが良い、6)新しい事を学ぶ事で新鮮な気持ちになる、9)韓国語を勉強する時間は日常と離れられるので良い』があり、協力者 B は「韓国語の学習が活力を与えてくれる」と名付けた。これについて協力者 B は「新しいことを続けることで気分転換ができる」と解釈し、「日常から離れてしたい勉強ができる」と回答した。

また、クラスター4 には『10)韓国語を通して知り合う人ができる事が面白い、12)自分より年上の人が頑張って勉強する姿を見るとはげみになる』があり、協力者 B

は「他人との交流と刺激」と名付けた。これについて協力者 B は「やる気になれる」と解釈し、「できることの強さを感じる」と回答した。

各クラスター間の比較について協力者 B は次のように解釈をした。クラスター1 と 2 の比較は「できるようになりたい語学学習」、クラスター1 と 3 の比較は「韓国語学習が楽しい」、クラスター1 と 4 の比較は「似ていない、クラスター1 が手段でクラスター4 が目的」クラスター2 と 3 の比較は「クラスター2 が手段、クラスター3 が目的」と解釈した。クラスター2 と 4 の比較は「韓国語を手段に」と解釈した。クラスター3 と 4 の比較は「日頃から離れられる、韓国語を手段にしている、学ぶことが面白い」と解釈した。そして、全体のイメージについては、「韓国語の学習を通じて刺激を受けながら目的を達成しようとしている」と解釈した。

4.3. 調査者による総合的解釈

上記にて協力者本人による解釈を述べたが、続いて調査者による総合的解釈を行う。

協力者 A は韓国語を学ぶことに対して喜びを感じ、継続的な学習につながる意欲も感じているようである。また、継続的な学習をすることにより、韓国をより身近に感じ、学ぶことによる可能性や広がりを感じていると見受けられる。そして、今後も学習を続けることにより、韓国語の学習が韓国との交流につながることを期待していると捉えることができる。

また、協力者 B は韓国語を習得していくことが実感できることで継続的学習につながっているようである。韓国語を知ることにより韓国を興味の対象としながら、日本との比較を通じて新たな発見もできているようである。また、韓国語学習を日常からの気分転換と捉え、背景の異なる他者との交流を楽しみながら様々な刺激を受け、学習意欲の向上にもつながっていると捉えることができる。

協力者 A と協力者 B は共に韓国語を学ぶことを肯定的に捉え、学ぶことにより何らかの可能性を感じていると見られる。さらには他者との交流による新たな発見や刺激を通じて韓国語を続けて学ぶことにつながっているようである。

5. 考察と今後の課題

分析結果をもとに生涯学習としての韓国語教育が持つ方向性について考察を行う。

まず、今回の調査において協力者 A と協力者 B は背景に相違点があるが、韓国語学習に対しては嬉しさや楽しさを感じながら肯定的な態度で望んでいることが明らかになった。これは、マルカム・ノールズの提起した成人教育学（andragogy）の特徴である「成人学習の支援者は、自発的・主体的であろうとする成人の心理的要求に応

えていかねばならない」（関口他 2009: 238）という点からも、積極的な姿勢で受講する学習者の嬉しさや楽しさが維持できる教育内容の提供や教育方法の開発が必要であると考えられる。一例として、韓国語課外講座受講生の学習動機として度々挙げられる「韓国のドラマを字幕なしで見たい」ことについては、映像やセリフを取り入れた授業を展開することにより、楽しみながら継続的な学習が行われることが期待できる。このような学習者の学習動機を満足させることができる教育内容や、楽しむことで学習者が負担なく続けて学習できる環境づくりが必要になってくるといえるであろう。

また、協力者のことばには、言語を通じた韓国人との交流や、同じクラスに所属する他者との交流も継続学習の理由であることが分かった。特に後者の場合、普段、人との交流は主に職場や居住地周辺に限られているが、講座のある日には普段の生活では接点は多くないながらも、同じ目的を持った学習者同士が相互に刺激を与えあいながら学べる場となっている。このことが継続的な学習の動機が維持できる理由でもあり、同じ目的を持った他者との交流も行えることが韓国語学習の意義であると捉えることができる。そのため、授業時には会話練習を導入する際にも学習を通じた相互交流につながる話題づくりも必要となると思われる。

今回の協力者から得られた回答内容を PAC 分析方法を通じて分析した結果、生涯学習としての韓国語教育の方向性を定めていくうえで基礎資料となる点が明らかになった。しかし、より多くの受講生からの聞き取りと分析を通じて事例を増やしながら韓国語学習の意義について探り、また既存のカリキュラムや教育内容と教育方法の点検も行いながら生涯学習としての韓国語教育のあり方を探ることを今後の課題としたい。

参考文献

新井克之（2015），いわゆる“実益”に結びつきにくい日本語学習の意味 グアテマラの学習者に PAC 分析を用いて，海外日本語研究創刊号, 31-56 頁.

安龍洙・渡辺文夫・内藤哲雄（2004），日本語学習者と日本人日本語教師の授業観の比較：個人別態度構造分析法 (PAC) による事例研究，茨城大学留学生センター紀要 2，49-59 頁.

安龍洙・太田亨・宋有宰（2013），日韓プログラム予備教育生の教師観及び授業観に関する一考察，金沢大学留学生センター紀要 16，15-29 頁.

李熙卿（2007），大学の韓国語学習者を対象とするニーズ分析，言語文化研究 26 巻 2 号，185-216 頁.

池田庸子（2010），日本人学生の異文化観に関する事例研究：海外留学予定者の場合，茨城大学留学生センター紀要 9，43-52 頁.

井上孝代（1997), 留学生の文化受容態度とカウンセリング-PAC 分析による事例研究を通して，

カウンセリング研究 30，216-226 頁.
林 炫情・姜 姫正（2006），韓国語および韓国文化学習者の意識に関する調査研究，人間環境学研究 5 巻 2 号，17-31 頁.
小澤伊久美・坪根由香里（2015），日本語を母語とする現職日本語教師 A の「いい授業観」PAC 分析を通じてわかること，舘岡洋子編『日本語教育のための質的研究 入門』，東京：ココ出版, 221-246 頁.
小泉匡弘・渡壁誠（2016），中学校技術分野に対する大学生の授業観，北海道教育大学紀要（教育科学編）第 66 巻第 2 号，127-136 頁.
関口礼子・小池源吾・西岡正子・鈴木志元・堀薫夫（2009),『新しい時代の生涯学習〔第 2 版〕』，東京: 有斐閣アルマ.
内藤哲雄（1997),『PAC 分析実施法入門：「個」を科学する新技法への招待』，東京：ナカニシヤ出版.
内藤哲雄（2002),『PAC 分析実施法入門〔改訂版〕：「個」を科学する新技法への招待』，東京: ナカニシヤ出版.
中川典子（2013），日本人留学生の異文化接触とアイデンティティ-留学前、留学中、帰国後のイメージ分析を通して-，流通科学大学論集-人間・社会・自然編-第 25 巻第 2 号，53-75 頁.
ハングル能力検定協会（2017),『2017 年版「ハングル」能力検定試験 ハン検 過去問題集〈5 級〉』，東京：ハングル能力検定協会.
Eduard C. Lindeman, The Meaning of Adult Education, New Republic, Inc. New York, 1926. 堀薫夫訳（1996)『成人教育の意味』，東京：学文社.